

氏名	片岡 祥
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	乙第3号
学位記授与年月日	令和2年2月29日
学位授与の要件	久留米大学大学院学則第14条第2項第2号による
学位論文題目	恋人支配行動からみた恋愛関係の理論的考察
学位論文委員会	主査 園田 直子 副査 安永 悟 副査 徳田 智代

I 論文要約・要旨

論文要約

恋愛関係内で生じる攻撃行動のメカニズムを解明することは、青少年の暴力を伴う恋愛関係に対する予防教育や介入方法を考案する上で重要な研究テーマである。本論文の目的は、恋愛関係における恋人支配行動の生起及び恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する理論モデルを構築し、この領域に貢献できる知見を得ることであった。まず、攻撃行動と束縛の研究レビューを通して、これらを説明するための枠組みとして「恋人支配行動」という概念を提案した。次に、愛着理論と配偶者維持行動の理論を土台として、恋人支配行動は恋愛関係に対する破綻への不安が背景にあることや、恋愛関係に悪影響を及ぼす場合と関係維持に貢献する場合があることについて議論を行った。そして、4つの実証的な研究を行い、恋人支配行動の生起は個人の特性変数・関係破綻への不安・恋人との関係構築時間の組み合わせから予測できること、強度が強い恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすが、束縛については悪影響を及ぼす場合もあるが、恋愛関係の妨げとならない場合や関係の維持に貢献する場合があることを実証した。最後に、本論文におけるこれまでの議論と研究知見から総合考察を行い、恋人支配行動の生起要因、及び恋人支配行動の強度が恋愛関係に及ぼす影響に関するモデルを構築し、その有用性と今後の課題について論じた。

論文要旨

1. 論文の目的

恋愛関係内で生じる攻撃行動に関する研究は1980年代後半から始まり、現在では世界的な研究テーマの1つとなっている。この背景として、恋人からの攻撃行動による交際中の精神面の悪化の問題や、結婚後に夫婦間の暴力へとつながっていくDVの問題、さらに夫婦間の暴力が子どもにモデリングされ青年期の恋愛関係の中で再現されていくという世代間伝達の問題が明らかとなってきたことがあげられる。また恋人間の攻撃行動は、ストーキング被害や殺人のように犯罪へとつながる場合もあり、恋愛関係内の問題が事件として取り上げられるケースは本邦も含めて世界的にみられることである。従って、恋愛関係内で生じる攻撃行動のメカニズムを解明することは一時点のみならず、個人の生涯、さらには次世代にわたる恋愛関係、そ

して犯罪という親密な二者関係にまつわる多様な問題に対する防止と予防という点で重要な研究テーマである。

これまでに約 30 年にわたる研究史を通して、恋愛関係内で生じる攻撃行動に関する知見は数多く蓄積され、それらを元にした介入プログラムや予防教育に関する試みは増加の一途を辿っている。その一方で、この研究領域の中心的な 2 つの命題である「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被行為者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」という点についてはいまだ多くの議論があり、理論面においても様々なモデルが散見している現状がある。

恋愛関係における攻撃行動の生起メカニズムと関係性に及ぼす影響に関する領域に貢献し、応用的な展開の礎を築くために、本論文ではこれらの諸問題を包括する理論モデルの構築を最終的な目標に掲げ研究に取り組んだ。まず、研究史のレビューを通して恋愛関係内で生じる攻撃行動の概念と種類の変遷について示した。加えて、近年では関係内で生じる束縛も問題ある行動の一部として取り上げられる場合が増えていた。束縛は近年の社会的な通信手段の変化により増加しているため、研究の俎上に載せる必要性が考えられた。これらのレビューより、多様化する恋愛関係内の行動を捉えることが従来の枠組みでは難しくなっている現状が明らかとなったことから、攻撃や支配を包括するために「恋人支配行動」という新たな概念を枠組みとして創出して研究を進めていくこととした。

恋人支配行動の様相を読み解く理論として、本論文では様々な理論の中から愛着理論と配偶者維持行動の理論を取り上げた。そして、愛着理論の観点からは、恋人支配行動は関係破綻の不安を背景として生じる二者関係内の関係維持行動であること、配偶者維持行動の理論からは、恋人支配行動は自身の恋人を略奪する恐れがある第三者からの接触を阻害するための二者関係外の関係維持行動であると位置づけた。これらより、恋人支配行動は恋愛関係の内外で生じる破綻の可能性を排除するための関係維持行動の 1 つとみなした。このように従来と異なる視点から恋愛関係における恋人支配行動の生起と関係性に及ぼす影響の解明に取り組むことで、この領域における新たな知見の獲得が期待された。

以上のような経緯を経て、本研究は従来の攻撃行動に束縛を加えた恋人支配行動という概念枠組みを用い、愛着理論と配偶者維持行動の理論から恋人支配行動を恋愛における関係維持行動の 1 つと位置づけて、その生起要因と関係性に及ぼす影響を明らかにし、恋人支配行動の理論モデルの構築を行うことでこの領域に貢献することを目的として行った。

2. 論文の構成

本論文は全部で IV 部 8 章から構成された。第 I 部第 1 章では恋愛関係内で生じる攻撃行動に関する国内外の研究動向について攻撃行動の萌芽的研究がみられる 1980 年代後半から現在までを対象にレビューを行った。また、攻撃行動の実態を把握するために、心理学系の研究だけではなく、国や市を主体となって行われた実態調査の内容についても積極的に取り上げた。加えて、近年取り上げられることが多くなってきた束縛や、攻撃行動の強度の問題についても言及を行い、最終的に約 130 の文献の引用がなされた。これらを元に、デート DV の枠組みを整理・拡張した恋人支配行動という概念的な枠組みの設定を行った。あわせて、本論文における攻撃行動と束縛の定義も行った。

第 I 部第 2 章では、恋人支配行動を説明する理論的枠組みとして愛着理論と配偶者維持行動の理論を取り上げ、これらの理論について概観していった。そして乳幼児期から青年期に至る愛着研究を通して、親密な二者関係内の関係メンテナンスが上手くいかない場合に恋人支配行動が生じることが考えられた。また、他の様々な生物における配偶者維持行動の研究を通して、第三者と自身のパートナーとの関係構築を阻むことで関係外の脅威を取り払うために恋人支配行動が生じることが考えられた。これらの議論を踏まえ、本論文では恋人支配行動は二者関係を維持し、第三者を排除するために生じる関係維持行動の 1 つと想定できること、恋人支配行動が問題となる場合は不適切で過剰な場合や強いダメージを伴う場合であることについて論じた。加えて、他の理論との比較を通して 2 つの理論が攻撃行動を捉える上で有用であることについて議論を行い、本論文の恋人支配行動に対する中心的な考え方を確立した。

第 I 部第 3 章では本論文の目的とそのための研究工程を示した。この研究領域は中心的な 2 つの論題と

して「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被行為者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」がある。本論文の目的は恋人支配行動の生起及び恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響の心理的な機序を関係維持行動という観点から明らかにし、恋人支配行動に関する理論モデルを構築することであった。そのために4つの研究を設定し、全体の道筋を図示した。

第Ⅱ部第4章及び第5章では個人特性に関係破綻の不安が媒介する生起モデルの妥当性の検証及び関係破綻の不安が恋人支配行動の誘因となる条件について明らかにすることを目的として研究1と研究2を行った。研究1では様々な先行研究における調査から項目を収集し、研究全体を通して用いることになる恋人支配行動尺度の開発を行った。加えて、恋愛内で生じる関係破綻の不安を測定するために愛着の分離不安に着目した恋人分離不安尺度を開発した。さらに、個人の特性をベースに恋人との関係変数が媒介して恋人支配行動が生起するという媒介モデルの妥当性について媒介分析を用いて検証を行った。その後、恋人支配行動の生起条件を検討するために、恋人分離不安、愛情、交際期間の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行い検討した。

第Ⅲ部第6章及び第7章では恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響を明らかにすることを目的として研究3と研究4を行った。研究3では項目反応理論を用いて恋人支配行動尺度を構成する項目群の強度を確認した。その後、恋人支配行動の行為経験及び被行為経験と恋愛の充実感との関連について交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行い検討した。研究4では様々な調査や自由記述から項目を収集し、項目反応理論を用いて弱い束縛と強い束縛を測定する尺度の開発を行った。そして、恋人への弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行い検討した。

第Ⅳ部第8章では第1章から第7章までに行った議論と研究知見から総合考察を行い、恋人支配行動の生起及び恋愛関係に及ぼす影響に関する理論モデルの構築を行った。恋人支配行動の理論モデルを元にして、生起要因に関する総合考察、恋愛関係に及ぼす影響に関する総合考察、本論文の社会的な意義、今後の課題と展望について論じた。

3. 主な知見

第Ⅱ部の主な知見は以下のとおりである。まず、恋人支配行動尺度と恋人分離不安尺度という測定ツールの開発に成功した。さらに、恋人支配行動は身体的・精神的・性的な暴力からなるまとまりと束縛に大別されることがわかった。また、暴力的支配行動の生起には共依存特性の強さが関与しているのに対して、束縛的支配行動の生起には共依存特性に加えて恋人分離不安が媒介変数として関与していることを示した。最後に、恋人支配行動は交際期間の長期化によりその頻度が増加することを明らかにした。これらのことより、恋人支配行動の生起モデルとして関係破綻の不安を媒介するモデルが想定できること、関係破綻の不安に長期の交際期間が組み合わさると恋人支配行動の誘因となることが示された。第Ⅱ部で得た知見は従来の研究知見と比較して新規性が高いものであり、研究上のインパクトが認められるものであった。生起要因に関する2つの研究を通して、そのメカニズムの一端を解明することができたといえる。

第Ⅲ部の主な知見は以下のとおりである。まず、恋人支配行動尺度は強い強度を測定している項目群からなることが示された。そして、恋人支配行動尺度で測定される項目群は恋愛関係に悪影響を及ぼすことを明らかにした。次に、弱い束縛と強い束縛を測定する尺度の開発に成功した。最後に、強い束縛は恋愛関係に悪影響を及ぼすこと、弱い束縛は恋愛の関係維持に貢献する場合があることを明らかにした。さらに、弱い束縛と強い束縛が同時に生じている場合に、弱い束縛が強い束縛の悪影響を抑制することがわかった。これまで恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすという知見が大半だった中で、問題ある行動として悪影響を及ぼす条件を解明した点が独創的な知見であった。関係性に関する2つの研究を通して、恋人支配行動が生じているにも関わらず、恋愛関係が破綻しないメカニズムの一端を解明することができたといえる。

第Ⅱ部と第Ⅲ部の知見を統合することで恋人支配行動に対する理論モデルを構築できたことが本論文全体の大きな知見の1つである。この理論モデルのから予見できることは、まず第1に、恋人支配行動の生起は個人の特性変数・関係破綻への不安・恋人との関係構築時間の組み合わせから予測できる点、第2に、強度が強い恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすが束縛については悪影響を及ぼす場合と関係維持行動

として機能する場合があるという点である。これらの知見はこの領域ではあまりみられないものであり、基礎的な知見として十分な価値があると考えられる。また、この知見は応用的な研究にも示唆に富む知見を提供すると考えられるものといえよう。

4. 考察

本論文で構築した恋人支配行動に対する理論モデルを元に考察を行っていく。

まず、恋人支配行動の生起についてであるが、個人の特性変数・関係破綻の不安・関係構築の時間という3つが影響しあいながら恋人支配行動へとつながっていくということがわかった。いいかえれば恋人支配行動は個人内・個人間・関係深化の3つの要因が複合的に絡み合うことで生じていくこととなる。この3つのうちのどこかに不具合や高まりが生じた時、恋人支配行動が生起することとなる。愛着と配偶者維持の観点からいえば恋人支配行動が生起するのは関係の破綻を回避するためであるが、心理的には恋人を強制的に自分の監視下に置くことで不安を低減し、安心感を獲得するためのいびつな関係維持行動とも解釈できるだろう。恋人支配行動は基本的には恋人の人格や状態を無視した自分中心の観点からの関係維持行動といえることができるだろう。

次に、恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響についてであるが、強い強度の恋人支配行動は関係維持行動として機能しないばかりか、恋愛関係を悪化させることがわかった。すなわち恋愛関係を維持するために行っているにも関わらず、恋愛関係が悪化していくというプロセスが想定できる。また、恋人支配行動が関係維持行動として機能する場合は弱い束縛を伴う場合であった。すなわち、束縛はある水準までならよいが、臨界点を超えると悪影響となってしまうという二面性を携えたものであり、強い束縛と弱い束縛では関係に作用する機能が質的に異なること、また、強い束縛も弱い束縛と組み合わせられることによってその機能が変容することが伺える。

恋人支配行動に関する本論文の知見より、周りからみれば問題あるようにみえるにも関わらず、継続する恋愛関係に対して、そのメカニズムを紐解くための知見を得たといえる。本論文より、条件次第では暴力や束縛は行為者と被行為者の恋愛関係への認識を悪化させないように機能することが示された。これまでに暴力や束縛が生じている恋愛関係の背景には行為者から被行為者への威圧や支配が背景にあるために交際の終結が困難であることが指摘されてきたが、本論文は継続する暴力や束縛を伴う恋愛関係に対して従来の知見に加えて新たな心理的機序を見出したといえる。加えて、恋人支配行動の生起要因に対する介入を考えていくことで、その予防や防止の糸口となる可能性があることも合わせて言及しておきたい。

さらに、恋愛関係内の問題は結婚後も継続することから、本論文の知見は配偶者間のDV研究にも貢献することができる。また、恋愛関係ではないものの、本論文の知見や理論的背景は友人関係や親子関係などの親密な二者関係における問題にも部分的に貢献できる場合もあるだろう。この点については、さらなる研究知見の積み重ねの中で検証していきたいと考える。

本論文より、問題ある行動が生じてながらも継続する恋愛関係の心理的メカニズムの解明、およびそのような行動を関係から消失させていくことに貢献する理論モデルを得たことが本論文の意義といえる。

5. 検討すべき課題

本論文の課題として以下の5つ課題があげられる。

第1の課題として、本論文の調査は全て個人を対象としたものであり、カップル調査を行っていない点があげられる。恋愛関係は個人変数と交際相手の変数、そして二者関係の合成変数から成り立つ関係である。本論文は二者関係の変数として交際期間や個人内の恋人分離不安を用いたものの、交際相手の変数については不明なままであった。不安や愛情に関する双方の組み合わせによって、恋人支配行動の生起や影響関係が変容することは十分に考えられることである。このことを明らかにするために、カップル調査を用いて検討することが必要である。また、弱い束縛は関係を良好にするという知見が得られたが、もしかすると弱い束縛は、カップルの片方からの一方向的なものではなく、相互に行っているために良好さが保たれている可

能性も考えられる。

第2の課題として、本論文は全て一時点での調査であり、恋人支配行動が生起する過去の文脈や生起後の未来の経過を検証していない点があげられる。そのため、本論文で構築した理論モデルの恋人支配行動に対する予測力については不明なままである。このことを明らかにするために、縦断的な調査や質的な調査から検討していくことが必要である。

第3の課題として、弱い束縛と強い束縛が同時に生起している恋愛が具体的にどのような関係なのか不明な点があげられる。2つの束縛が同時に生起している場合、恋愛関係は強い束縛のみを受けている時に比べてあまり悪化しないことは示されたものの、対人関係の縮小やメンタルヘルスの低下など様々な困難を抱えた恋愛関係が構築されている可能性がある。従って、束縛が恋愛の関係維持行動として有効なものなのかどうかはまだ結論を下すことができない。この課題の解決のためには、2つの束縛が同時に生起している恋愛関係の内実について適応に関する指標を用いて検討していくことが必要である。

第4の課題として、恋人支配行動の測定があげられる。恋人支配行動が生起している恋愛の方がそうでない恋愛にくらべて少数派であることから、複数の研究において尺度にフロア効果が生じている可能性が考えられた。これは、この領域の多くの研究でみられる傾向である。分析には効果量や信頼区間といった有意水準以外の他の指標も合わせて記述を行うことや、類似の研究の中で知見の頑健さを確認すること、メタ分析を行うことなどが必要である。

第5の課題として、恋人支配行動の予防や防止に向けた取り組みに対する本論文の知見の運用があげられる。本論文の最終的な目標が理論モデルの構築であったため、この点についてはあまり言及を行っていないが、開発した尺度のスクリーニング尺度化や、生起要因に対する介入、関係が悪化している恋愛に対する支援など、本論文の知見を土台とした予防や防止法の考案を行っていくことが必要である。

これらの検討課題を踏まえた上で、本論文で構築した恋人支配行動の理論モデルについてさらなる知見を積み重ねていきたいと考える。

6. 総合考察

本論文は攻撃行動における研究領域の中心的な2つの命題である「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被害者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」に沿って検討を行ってきた。本論文の知見より恋人支配行動は関係破綻への不安を軸として、破綻を回避するために生じる関係維持行動の1つと結論づけることができ、後者は恋人支配行動の強度と内容により恋愛の関係維持に貢献する場合があるためと結論づけることができた。これらのことより、本論文は攻撃行動の研究領域における中心的な命題の解決に寄与する新たな知見を得ることができたといえる。

また、本論文の知見の社会的有用性として恋人支配行動が関係維持行動として機能する条件について明らかにしたことから、問題ある行動が生じている恋愛関係が破綻に向かわないメカニズムの一端を解明することができたといえる。さらに、恋人支配行動はその種類・関係破綻への不安の強さ・恋人との関係構築時間により生起の機序が異なることが示されたことから、恋人支配行動が生起している恋愛関係に対する介入を考える上で役に立つ結果であるといえるだろう。これらより恋人支配行動の生起メカニズムの解明と予防や防止プログラムの構築という恋人支配行動の研究領域に貢献できる有用な基礎的知見を得たといえる。

このように、世界的に研究が進みつつある現状でなお議論が続く恋愛関係の問題に対して恋人支配行動及び関係維持行動という新しい視点から、行動の生起と関係性に及ぼす影響に関する理論モデルを構築した。このモデルはこの領域の基礎及び応用研究にも有用なモデルとなる可能性があるといえるだろう。

II 論文審査の要旨

片岡祥氏により提出された学位請求論文に関する審査要旨を以下に報告する。まず、本論文の目的と構成、主な知見を確認する。そのなかで本論文に対する審査委員会の評価および本論文に対する判定理由を述べる。

1. 論文の目的

恋愛関係内で生じる攻撃行動のメカニズムを解明することは、青少年の暴力を伴う恋愛関係に対する予防教育や介入方法を考案する上で重要な研究テーマである。親密な人間関係における暴力や過度の束縛の問題は、通常の間人間関係とは異なる性質を持ち、親子間では虐待、夫婦感ではDVとして位置づけられているにもかかわらず、なかなかなくなる。親密な人間関係における暴力や過度の束縛は、相手を支配し、コントロールしようとすることでより関係を強固にするためのひとつの手段であると考えられる。本論文の目的は攻撃行動における研究領域の中心的な2つの命題である「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被害者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」について検討することであった。そのために攻撃や支配を包括するものとして「恋人支配行動」という概念を創出し、恋愛関係における攻撃行動の生起と関係性に及ぼす影響に関する理論モデルを構築し、この領域に貢献できる知見を得ることであった。

2. 主な知見

本論文の主な知見は大きく2点に集約される。

- 1) 恋人支配行動の生起は個人の特性変数・関係破綻への不安・恋人との関係構築時間の組み合わせから予測できることを実証したことである。まず、恋人支配行動の生起モデルに関する研究では、個人の特性変数をベースに関係破綻への不安を引き金として恋人支配行動が生起することを実証した。次に、恋人分離不安と交際期間の分析から、恋人支配行動の生起は恋愛関係の段階により左右され、交際期間が長くなるほど生起しやすいことを示した。しかも行動の内実は質的に異なる可能性が示唆された。この観点は個人の特性変数の影響、恋人との関係変数の影響によって恋人支配行動の生起を予測するための足掛かりをつくることができたといえる
- 2) 強度が強い恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすが束縛については悪影響を及ぼす場合と関係維持行動として機能する場合があることを実証した。

恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響については、全般的な強い恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすことを確認した。ただし束縛については強度が弱い場合は関係維持に貢献する場合があることを見出した。さらに、弱い束縛と強い束縛が同時に生じている場合に、弱い束縛が強い束縛の悪影響を抑制することも示された。これまで恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすという知見が大半だった中で、問題ある行動として悪影響を及ぼす条件と関係維持行動として機能する条件について明らかにした。

本論文は攻撃行動における研究領域の中心的な2つの命題である「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被害者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」に沿って検討を行ってきた。本論文の知見より①恋人支配行動は関係破綻への不安を軸として、破綻を回避するために生じる関係維持行動の1つと結論づけることができ、②後者は恋人支配行動の強度と内容により恋愛の関係維持に貢献する場合があるためと結論づけることができた。このことは、恋人への攻撃や支配は、支配する側にとっては、関係を維持するために行っており、弱い束縛は関係を良好にすることに貢献するというを示している。本論文は攻撃行動の研究領域における中心的な命題の解決に寄与する新たな知見を得ることができたといえる。

3. 論文の評価

①独創性

本論文の独創性として、大きく2つのことがあげられる。

第1に研究を進めるために行った議論の視点にある。具体的には、従来の攻撃行動と束縛に関するレビューより恋人支配行動という概念的な枠組みを構築したこと、行動に強度という観点を取り入れて検討したこと、愛着理論と配偶者維持行動の理論の2つを援用しながら理論展開していったこと、媒介モデルの観点から恋人支配行動の生起モデルを検討したこと、恋人支配行動が関係破綻への不安から生起すること及び関係維持に悪影響を及ぼさないあるいは貢献する場合があるという観点から検討したことがあげられる。どちらかといえば実態調査や狭い枠内での研究に終始してしまいがちで理論的な背景が乏しい面があった恋人支配行動の研究領域に新たな理論的枠組みを提供するものであった。

第2に、統計分析の行い方である。弱い束縛と強い束縛を測定する尺度を開発するにあたり、項目反応理論を援用する手法を用いた。これは、従来の因子分析では次元にまとまってしまうが質的に異なるものとして取り扱うべき事象に対する画期的な取り組みであった。また、媒介分析については対象人数の少なさをブートストラップ法によって解決し、階層的重回帰分析にそぐわない変数に対しては対数変換を行うなど、繊細な変数を扱うために必要な高度な分析を用いるにあたり、工夫を凝らしながら研究を進めていった点も特記すべき事項である。

②有用性

本論文は、恋人支配行動が関係維持行動として機能する条件について明らかにしたことから、問題ある行動が生じている恋愛関係が破綻に向かわないメカニズムの一端を解明するための結果を得たといえる。また、恋人支配行動はその種類・関係破綻への不安の強さ・恋人との関係構築時間により生起の機序が異なることが示されたことから、恋人支配行動が生起している恋愛関係に対する介入を考える上で役に立つ結果であるといえるだろう。これらは恋人支配行動の生起メカニズムの解明と予防や防止プログラムの構築という恋人支配行動にまつわる研究領域に貢献できる有用な基礎的知見であるといえる。

③信頼性・妥当性

全ての研究について有意水準を5%に設定し、分析の効果量を明記した。因子分析を用いて開発した尺度は信頼性と妥当性の確認を行った。媒介分析はブートストラップ信頼区間を、重回帰分析は多重共線性の指標(VIF)の確認を行った。また、調査参加者に対して十分な倫理的配慮を行った。記載すべき利益相反は存在しなかった。以上のことより、研究全般に渡り信頼性と妥当性は確保されたと考える。

④本論文の評価

本論文の目的は攻撃行動における研究領域の中心的な2つの命題である「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被行為者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」について検討することであった。そのために攻撃や支配を包括するものとして「恋人支配行動」という概念を提案することで、恋愛関係における攻撃行動の生起と関係性に及ぼす影響に関する理論モデルを構築し、複数の学術論文として公表することができた。さらに、この研究の一部に関しては、学術振興会科学研究費補助金の対象となる研究に採択されるなど、この研究の有用性も評価されているといえる。これらのことから、博士学位論文として高く評価できると考え、標記の評価とする次第である。

III 論文審査結果の要旨

片岡 祥氏より、2018年6月に提出された学位申請論文「恋人支配行動からみた恋愛関係の理論的考察」は、2018年6月29日の予備審査において受理が認められ、同日審査委員会(主査;園田直子,副査;安永悟,徳田智代)が立ち上げられた。審査委員会は学位申請論文を詳細に吟味し、2018年9月10日および同年12月10日、2019年10月4日に口述試問を実施した。さらに、文書を通じて同年12月に

試問を行った。また、最終審査（公聴会）を2月6日に実施した。公聴会終了後、同日に最終的な審査委員会を開催した。本論文の審査は、1年9か月に渡ったが、1年を超過することに関しては、申請者の職務上の事情によるものであり、2019年9月9日の研究科委員会によって審議し、承認されている。当該委員会では、一連の審査内容を踏まえ、申請論文の内容、申請者の学識および研究能力について慎重に検討を行った。その結果、下記「論文審査の要旨」に述べた理由により、本学位申請論文に対する判定を「合格」とし、評価を「A」とすることで合意に達したので報告する。